

若年女性を 対象とした 支援の在り方 に関する研究

Colaboとつながった
若年女性に着目して



一般社団法人Colabo

目次

はじめに	2
1 本報告書の趣旨と調査の概要	3
2 若年女性が経験する困難と支援課題	5
2-1. Colaboとつながる若年女性の状況	5
2-2. 活動記録の分析から見た支援課題	8
3 Colaboの若年女性とのかかわり	17
3-1. LINEのやり取りから見るかかわり	17
3-2. かかわりによる若年女性への影響 —2人の若年女性の事例分析から	23
4 若年女性に対する支援のあり方に関する提案	33

はじめに

Colabo は「すべての少女に衣食住と関係性を。困っている少女が搾取や暴力に行き着かない社会へ」を合言葉に、2011 年から虐待や性搾取の被害に遭うなどした若年女性を支える活動を行ってきた。夜の街で家に帰れずにいる若年女性を探して、声をかけ、つながるアウトリーチや、夜の街での 10 代女性無料カフェ、夜間でも駆け込める一時シェルターや、シェアハウス（中長期シェルター）やアパートの運営などを行い、これまでにしかかわった若年女性 は 1 万人を超えている。

家出や性搾取の問題は、子どもの「非行問題」として語られ、行政に支援を求めても壁や温度差を感じるが多かった。そこで、若年女性が危険に取り込まれている実態や、その背景にある社会福祉の機能不全、若年女性を性搾取に誘導する手口や搾取の構造を多くの人に知らせるため、Colabo とつながる若年女性と共に声をあげてきた。さまざまな取り組みから、家出や性搾取に対するメディアの報じ方や市民の見方が少しずつ変化し、2018 年には厚労省が「若年被害女性等支援モデル事業」を制定し、2021 年には本事業化された。2022 年には日本ではじめての女性支援の根拠法となる女性支援法が成立し、性搾取に取り込まれやすい若年女性に対する支援が法律に盛り込まれ、予算化された。しかしその後も、全国から家出した青少年が歌舞伎町に集まり続け、少年少女を狙った性売買業者や犯罪組織の活動は活発化している。

若年女性がどのように公的支援からこぼれ落ち、性搾取に誘導されているのか、その構造を理解することなしに、若年女性を支援することは不可能である。支援の必要性が認識されても、具体的な支援の在り方が理解されないまま、形だけの支援が広がりつつあることに危機感を覚えている。たとえば、「自立支援」が必要とされるが、その「自立」は単なる経済的自立として捉えられることが多くある。さまざまな状況から経済的自立が容易ではない若年女性も多く、それ以前に生きることへの期待や希望を感じていない人も多い。そうした若年女性が、自分自身のこれからを考え、生活していくためには、社会への信頼や期待、自分自身の力を認識し、日々の行動を積み重ねていけるようになることが必要であり、そのためには、他者との関係性やさまざまな経験が必要である。

Colabo は若年女性たちと「共にある」ということを大切にしているが、それはどういうことなのか、どのようなかわりを持ち、どのように活動しているのかを伝える必要があると考えてきた。そこで私たちの若年女性たちとのかかわりの記録から、必要な支援の在り方を分析し言語化することを試みた。本調査を通して、若年女性支援の在り方についての理解や議論が広まることを願っている。

1

本報告書の趣旨と調査の概要

近年、若年女性支援への注目は高まっている。2018 年 7 月 30 日に、「困難な問題を抱える女性への支援のあり方に関する検討会」（厚生労働省）の第 1 回が開催され、9 回にわたる議論ののち、2019 年 10 月に「困難な問題を抱える女性への支援のあり方に関する検討会中間まとめ」が提出された。その後、2024 年 4 月 1 日から「困難な問題を抱える女性への支援に関する法律」（いわゆる「女性支援新法」）が施行された。

「困難な問題を抱える女性への支援のあり方に関する検討会中間まとめ」では、売春防止法や婦人保護事業などが現代社会を生きる女性の実情にそぐわない状況や、とりわけ若年女性への対応の必要性が確認され、女性への包括的な支援の必要性が指摘されている。AV 出演への強要や、JK ビジネス、性売買など、若年女性の性暴力・性搾取被害は後を絶たない。また、児童福祉法などの制度に基づいた支援に対応されることなく、家を出る・出ざるを得ない若者もいる。

日本では、こうした若年女性への支援を、Colabo などの民間団体が試行錯誤のなかで先駆的に取り組んできた。今後の女性支援新法における官民協働の事業の促進に向けて、実際の現場で得られる知見から、いま、何が課題となり、何が取り組みとして必要なのかを明らかにしていくことが求められている。

そこで Colabo では、日本財団からの助成を受け、「若年女性を対象とした支援の在り方に関する研究～ Colabo とつながった若年女性に着目して～」というテーマで、実践と調査検討のグループを立ち上げた。調査検討グループは 2021 年度から、若年女性 14 人の協力を得て、若年女性の相談にのり、彼女らに必要な住まいや居場所、食事、衣服などを提供してきた Colabo の活動記録を検討してきた。本報告書では、そうした分析・整理の結果をできるだけ平易なかたちで示し、それを踏まえて既存の制度の改善可能性を提起する。

なお、本報告とは別に Colabo の活動やその活動にかかわってきた若年女性の状況、制度上の問題について、仁藤夢乃編『当たり前の日常を手に入れるために』（影書房、2022 年）で詳細にまとめられており、本報告書と併せてそちらもご覧いただきたい。

調査・分析の概要

目的

Colabo の活動記録を分析することにより、若年女性がどのような困難に直面してきたのか、その際に既存の制度（児童相談所や女性相談などの公的機関等）を通じてどのような対応を経験してきたのか、Colabo にかかわることによってどのような変化が生じてきたのか、Colabo ではどのように若年女性たちにかかわってきたのかを検討する。

協力

Colabo の活動記録の分析への利用の承諾を 14 人の若年女性から得た。彼女らは、これまで Colabo の活動に参加してきた若者である。調査検討に際しては、事前に大谷大学倫理審査委員会の審査を受けて、承認を得た（審査番号：021-04 および 022-01）。調査検討グループのメンバーから活動記録の利用を口頭・文章で説明し、一定の承諾撤回期間を設けた後、協力を得られた若年女性にかかわる活動記録を検討している。協力者の年齢層は、協力承諾時において 10 代後半（18 歳以上）から 20 代であった。

分析

分析する活動記録は、Colabo の活動に際してスタッフが記録した文章や若年女性とスタッフとのやりとりである。

調査検討グループ

岡部茜（大谷大学）、阿比留久美（早稲田大学）、阪東美智子

※本検討における限界

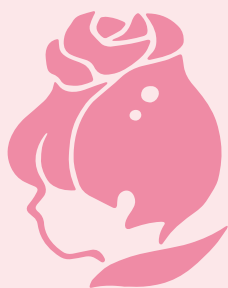
なお、本調査では、本人から直接聞き取りを行って情報を集めたわけではなく、Colabo の記録を使用しているため、情報バイアスがあることは否めない。取得した情報は、Colabo とのかかわりが強い機関・団体の情報に偏っている可能性がある。また、本人が Colabo に開示していない交友関係や情報は把握することができない。関係性については、Colabo の主観が記録に反映されている可能性がある。

2

若年女性が経験する困難と支援課題

2-1. Colaboとつながる若年女性の状況

Colabo のような民間の団体とつながる若年女性はどのような状況にあるのだろうか。ここでは代表的な3人の例を示す。これらは、本調査への協力を得られた若年女性の状況を混ぜ合わせて作成したものであり、若年女性とかかわる活動をしている人には、似た状況にあった具体的な誰かが思い浮かぶ例だろう¹。



両親は小学校の頃に離婚し、一緒に暮らしていた母親から虐待を受けた。児童相談所に保護され、児童養護施設で18歳までを過ごす。そこから自立援助ホームに入居したが、職員と折り合いが悪く、ルールを複数回破ったことで退所するように言われ、退所することになった。住み込みの仕事などを探すも見つからず、その当時付き合っていた彼氏の家に移り住んだ。しばらくして生理が来ていないことに気づくも、妊娠しているかもしれないと思うと不安で怖くなり自分の体調の変化を気にしないように生活していた。徐々にお腹が大きくなっていき、体調も悪くなった頃に、彼氏が冷たくなり同棲していた家を追い出された。友人の紹介でColaboの活動を知り、Colaboに連絡した。

母親が父親から暴力を受けており、本人が小学生のときに母親は自死した。その後、父親からの性虐待を受け、中学の先生に相談し児童相談所につながったが、保護には至らなかった。しかしその後も一時的におさまっていた性虐待が再び続き、高校の時に家出して友人の家に泊めてもらうなどして生活するようになった。生活習慣が不規則になり、通学が続きず高校を中退して就職をした。しかし、就職した会社の労働環境が劣悪で、体調を崩して仕事を辞めざるを得なくなった。中学のころに相談していた学校の先生にメールをして、中学の先生からColaboを紹介されつながった。



¹ あくまでイメージしやすいように例を出したが、若年女性の経験してきた状況はさまざまであり、具体的な状況については仁藤夢乃編『当たり前の日常を手に入れるために』（影書房、2022年）のインタビュー部分を参照のこと。



両親から特に関心をむけられずに育った。親は仕事などに忙しくしており、家にいても所在のなさを常感じて過ごしていた。中学から不登校気味で、高校の時に同級生との人間関係のトラブルでまったく通学しなくなり、中退した。その後はアルバイトをしてお金をためて、数十万円貯金のできたので家出して東京にやってきた。しばらくはホテルやネットカフェで生活していたが貯金も尽き、何度か性を買われることでお金を得て生活続けるも、精神的につらくなり、SNS でみつけた Colabo に連絡して、Colabo のシェアハウスにつながった。

これらの例は、協力を得られた若年女性 14 人の、Colabo につながるまでの公的支援機関への相談歴や施設などへの入所歴を中心にして、経緯を以下の三つに分類し、それをもとに作成したものである。

- ① 公的機関が関与し、施設での保護に至ったが生活が安定しなかった
- ② 公的機関が関与したが、保護にならず家を出た
- ③ 公的機関は関与しておらず、家を出た

今回協力を得られた 14 人すべてが、親からの暴言や暴力、ネグレクト、親の逮捕などの不安定な家庭状況にあった。公的機関が関与したが状況が安定しなかった人もいれば、公的機関とのかかわりがなかった人もおり、友人や公的機関・教育機関の人の紹介、または自ら探すことによって Colabo につながっている。

では、14 人はそれぞれどのように三つの経路をたどっていたのか。それを以下で簡単に整理する。

① 公的機関が関与し、施設での保護に至ったが生活が安定しなかった

14 人中 8 人が、保護者からの虐待などによって、児童相談所などを經由して一時保護所や児童養護施設、自立援助ホーム、少年院などに入所した経験があり、安定した生活が得られずに Colabo を頼ってきていた。そのうち、3 人は自立援助ホームを何らかの理由で不本意に出ざるを得ない状況にあった。公的機関の介入によって虐待のある環境から出ても、自宅へ戻ることであり、そこでまた虐待を受け、家出している若年女性もいた。

② 公的機関が関与したが、保護にならず家を出た

14 人中 3 人が、本人や関係者・機関からの連絡・通報を受けて、児童相談所などが関与していたが、何らかの理由で施設への入所には至っていなかった。それらの理由には、虐待があることが加害者（親）によって隠されている、児童相談所などによって適切な判断がなされない、通学が難しくなるため本人が保護を選べない、若年女性の経歴などから受け入れ施設が見つからないなど、様々である。こうした状況にあった若年女性は、その家庭状況に耐えられずに最終的には自ら家を出ていくが、その後、安定した生活を得ることが難しく、困難に直面することになっていた。

③ 公的機関は関与しておらず、家を出た

14 人中 3 人が、児童相談所などに関与する経験がこれまで一度もなかったが、家族からの暴力や暴言、経済的困窮、ネグレクトなどがあり、家が安心できる場ではなく家を出ることを望む状況にあった。彼女らの場合、成人になるまで一度も児童相談所などにつながっていないため、児童福祉施設や関連する奨学金などの制度の利用が難しい。またこれまで公的機関が関与していないため、民間団体につながることでようやく、無保険や日本国籍がないことによる制度利用上の重要な問題が明らかになることがあった。そうした場合、医療や必要な福祉制度が受けられない状況にあることもあり、様々な権利回復のための手続きが必要になっていた。

以上のように、Colabo とつながる若年女性の状況を、公的機関とのかかわりから整理してきた。経緯の整理からは、公的機関での支援で対応しきれない若年女性の状況が確認できる。

①からは、児童福祉のその後のサポートの整備の必要性が、②からは、児童福祉制度の課題や充実の必要性が、③からは児童福祉制度外でのサポートの仕組みの必要性が確認できる。

2-2. 活動記録の分析から見た支援課題

若年女性はどうのような困難を経験し、どのように支援から排除されるのか

ここでは Colabo の活動記録を検討し、複数の若年女性に共通してみられた経験を抜き出し、既存の支援制度のどのような仕組みが若年女性を遠ざけ支援制度から排除しているのかを可視化する。

若年女性を経験してきた支援からの排除や困難に関連して 14 人の若年女性と Colabo の活動記録から見出された背景を、ここでは以下の六つに大きく整理した。

① 定位家族＝生活基盤ではない状況

- i) 虐待：安心して生活できる場所がない
- ii) 虐待によるその後の生活の制限 iii) 保証人や緊急連絡先等の不在

② 試行錯誤が許されない人生経路

③ 個人化された妊娠・出産・育児

- i) 出産に至るまでの葛藤と困難
- ii) 出産後に若年女性が直面するストレスや困難

④ 性搾取

⑤ 福祉機関での経験／構造的問題

- i) 支援を求めても対応されない ii) 職員からの不信感を抱かせる対応
- iii) 厳格・理不尽なルールへの拒否感 iv) 職員からの暴力・性搾取
- v) 煩雑な手続き
- vi) 福祉機関の連携不足・あるいは責任の押し付け合い

⑥ 非福祉機関での経験（病院・大学・雇用機会等）

- i) 虐待問題への無理解 ii) 悪者化される経験
- iii) 雇用機会での搾取

簡単にではあるが、それぞれについてまとめる。

① 定位家族² = 生活基盤ではない状況

Colabo につながる若年女性の特徴として、多方面にわたる「居場所のなさ」があげられる。ここでは、安心して安全に過ごすことができると本人が認識し、居心地のよさを感じている場を「居場所」とする。Colabo が会える若年女性のなかには、親が子どもを養育できる状態になく、幼少期から安定して落ち着いた生活をする事ができない状況で日々を過ごしてきた者が多い。

i) 虐待：安心して生活できる場がない

Colabo につながる若年女性が物理的に家にいることができない理由として、家族からの虐待やネグレクトや家庭不和がある。自宅が安心できる場ではなかった若年女性たちは、自宅以外の場所で生活せざるを得ないため、ネットカフェなどを一時的な拠点にしたり、寝食の場を提供する人のもとに身を寄せることになる。しかしそれらは、若年女性たちに安心と安全を与える家のような場所にはなりえない。居場所=寝場所を提供するのは、アルバイト先の同僚や SNS や繁華街で知り合った人、ホストやスカウトといった夜の街で出会った人、などとなる。かれらは、若年女性たちがその瞬間に必要としている居場所や関係性を提供し、彼女たちのニーズに即時的に応えるが、必ずしも信頼し安心できるものではない。結果的に寝場所を提供してくれた相手からレイプなどの性被害に合う例は枚挙に暇がない。見返りなく寝場所を提供する相手の場合にも、相手側の事情もあり、結果的に長期間にわたってそこに住むことはできず出ていくことになりがちである。

ii) 虐待によるその後の生活の制限

虐待の経験は、加害者から離れた後にも影響する³。身体的暴力や性暴力、心理的虐待やネグレクトを経験した若年女性の場合、物理的に家庭に居場所がないだけでなく、安心感や自尊心を育むことができずにきた場合が少なくない。虐待などの影響による PTSD、抑うつ、過剰反応などといった状態にあり、精神状態が安定せず、アルバイトの継続が困難であったり、安定的な人間関係の構築が難しかったりというようなことが起きている。虐待は、若年女性たちにとっての家を「帰ることのできない場所」にするが、背景を知らない大人にとっては、家に帰れない彼女たちの状況・事情よりも、その結果としてあらわれる家出や性産業との関わりといった行動のほうが問題化されてしまう。それは他者との関係構築を難しくさせ、社会的孤立につながり、若年女性たちを追い詰めている。

² 定位家族とはその人が生まれ育った家族のこと。

³ こうした過酷な家庭環境での経験の影響に関しては、近年日本でも認知が広まる ACE サバイバー研究などで明らかにされている。例えば、三谷はるよ『ACE サバイバー』（筑摩書房、2023 年）などを参照のこと。

iii) 保証人や緊急連絡先等の不在

Colabo とつながる若年女性たちは、家族が彼女たちを支えてくれる存在になっておらず、家族に依存できない状況になっていることが多い。日本は家族による支え合い（家族福祉）に依存する部分が多いということはよく指摘されるところであるが、Colabo にかかわる若年女性たちはまさにその弊害を被っているといえる。たとえば、大学入学や就職、賃貸物件への入居、入院、子どもの保育園通園などの手続きの際、一般的には家族が保証人や緊急連絡先となることが想定されているが、家族との関係が良好でない場合や、家族に頼れない状況にあることもある。家族に代わりそのような役割を担ってくれる存在に出会うことも難しく、Colabo スタッフが緊急連絡先や保証人となることもある。

② 試行錯誤が許されない人生経路

Colabo がかわる若年女性のなかには、将来のビジョンが描けなかったり、安定しなかったり、仕事が続かず転職をくりかえす者もいた。実現不可能そうな夢を語ることや、繰り返される離職などの出来事は、一般的には若年女性の将来の見通しの甘さや計画性のなさとして批判されがちである。しかし、若者時代は試行錯誤を繰り返しながら、自らの歩む道を模索することが保障される必要がある。そのためには、彼女たちと丁寧に話し合い、伴走していく「誰か」が必要になる。それを親や学校の教員がカバーすることが多い日本社会において、親を頼らず、またそれゆえに安定した学校生活を送りづらかった若年女性がそのような存在を見つけることは難しい。Colabo ではスタッフが、大学進学が可能となるよう給付型・貸与型奨学金を探し、進学できるような条件を整えるサポートをしたり、若年女性と一緒に自分の希望と関心を語り合うことによって、若年女性たちの歩みに伴走している。それによって、若年女性たちは少しずつ自分の生きる道を模索できるようになっている。

③ 個人化された妊娠・出産・育児

i) 出産に至るまでの葛藤と困難

Colabo では、路上での生活が継続されるうちに若年（10 代後半から 20 代前半）で妊娠し、出産・育児をする若年女性ともつながり、妊娠・出産に必要な諸手続きに伴走するとともに、その後も育児のフォローをし続けている。若年女性たちはしばしば妊娠・出産・育児のプロセスで相当な葛藤に直面することになる。まず、妊娠時に、それまで生理サイクルを意識していないことや、妊娠したことを否認する気持ちがあることから、妊娠を自覚・自認できない場合がある。そして、妊娠を否認しているうちに中絶ができない週数になってしまう。また、自身が妊娠したことへのリアリティをもてないと同時に、妊娠・出産がどのようなことを意味しているかを知らないために、妊娠・出産に至るまでの経過についても想像できないことがある。

若年妊婦等への支援については、児童福祉法で「出産後の養育について、出産前において支援を行うことが特に必要と認められる妊婦」を特定妊婦と位置づけ保健師や子ども家庭支援員等がサポートを行う制度が設けられており、また、「性と健康の相談センター事業」では若年妊婦等に対する SNS やアウトリーチによる相談支援、緊急一時的な居場所の確保などが実施されている。しかし、上記のような葛藤や困難を抱える若年妊婦の多くは、自ら相談に訪れたり適時に受診したりすることができず、公的な支援につながっていないのが実情である。

ii) 出産後に若年女性が直面するストレスや困難

若年女性たちは出産後の育児の際にも大きな不安とストレスを抱える。マタニティブルーや産後鬱など、出産前後に精神的に不安定になることはしばしば生じるが、Colabo が出会う若年女性たち、特に妊娠出産を喜び、彼女たちをサポートしてくれる家族やパートナーが存在していない場合にはなおさら出産をめぐるストレスは大きい。また家族から虐待を受けたり、社会的養護のもとで育つ経験をしていたり、僅かな社会関係の中で育ってきた若年女性たちは、親としてのロールモデルを持ちづらい。加えて、新生児や乳幼児の育児はただでさえ負担が大きいにもかかわらず、その育児をサポートしてくれる存在もほとんどいない。そのため、子育てが結果的に子どもへの不適切なかかわりになってしまう若年女性がいた。

こうした状況は、若年女性の「無計画」な性行動と妊娠・出産・育児の「無知」や「能力不足」として、若年女性たちに責任が帰せられることが多い。しかし、10 代から 20 代前半ではまだ妊娠・出産・育児について十分な知識や準備がないことは珍しくない。さらにそれを支え

る家族や友人がいない場合、経験される困難は彼女たち個人の責任ではなく、妊娠・出産・育児が個人化され、自己責任での対応を求める社会の側の問題である。

④ 性搾取

若年女性たちのなかには、日々生活をしていくために性売買にかかわる者もいる。住居が安定しないなかで寝泊まりする場を確保し、生活費を稼ぐことは、一般的なアルバイトではフルタイムで働いても困難である。学歴や職歴がない若年女性にとって、日々の生活を維持するだけの収入を得られる仕事は限られ、若さが価値となり短時間で高額を得ることができる手段として性売買をせざるを得ない状況に追い込まれていた。

しかし、性売買は多くのリスクを伴い、今回調査をした若年女性の心身を傷つけていた。路上で出会う男性やスカウト・ホスト等から性売買に斡旋された場合、収入が中抜きされることもある。それでも、他に頼れる人や寝る場所がないため、その状況のまま過ごさざるを得ない若年女性は少なくない。このようにして、若年女性たちは、性売買に関わり、性搾取や性暴力の被害にさらされてしまう。また、性売買への参入が自己選択として捉えられることによって、それらの影響は自己責任として回収されがちである。しかし、Colabo につながった若年女性たちは、「本当はやりたくない」「嫌だ」「怖い」と感じながらも、生きるためにそうせざるをえない状況にあった。

また、路上にいて出会った男性により、性売買を促されたり性売買業者を紹介されるケースもある。彼らは、若年女性の孤独や不安に寄り添うそぶりを見せながら、性売買の見返りに金銭を与えることで若年女性を精神的・物理的に即座に支えるかのようにして、性売買へ誘導する。つまり、居場所のない若年女性たちにとって、路上で出会った男性やホストは、今まさに彼女たちのいる場所で彼女たちのペースや話し方・雰囲気に合わせて話を聞いてくれ、彼女たちの事情に迅速に答えてくれるかのような存在となる。一方で、公的機関では支援を受けるまでに時間がかかり、若年女性が日常的に使わない用語や言葉遣い、振る舞いが前提となり、支援者の規範・枠組みに若年女性が合わせる必要が生じる。なおかつ、公的機関では職掌の範囲を超えた問題への対応が難しい。そのため公的機関の支援よりも、路上で出会う人々が若年女性たちにとっては魅力的で有力なものとなる。そのことも、性売買周辺の男性が公的支援よりも若年女性たちに選ばれることにつながっているだろう。

⑤ 福祉機関での経験／構造的問題

これまでも確認したように、生活が困窮化して家出した若年女性たちは、最初から福祉機関を頼っていないわけではない。しかし、いくつかの要素によって若年女性たちは福祉機関からの支援を拒否・忌避するようになっていた。今回の検討からはその背景として六つの要素が見られた。

i) 支援を求めても対応されない

比較的多くの若年女性たちは Colabo につながる前に何度か福祉機関を頼った経験をもっていた。しかし、そこで助けてもらえなかったという思いを重ねることで、福祉機関への不信を募らせ、頼ること、助けを求めることをしなくなっている。今回の活動記録から見られたものとしては、親権者が保護することが第一に考えられることによって若年女性が福祉制度を利用できず、結果的に危険な状況で生活せざるをえない場合があった。その場合、保護を求めて児童相談所や警察を訪れるが、虐待が認定されず、保護に至らない。しかし若年女性はある理由があり親元に戻ることを拒んだり、戻れない状況にあるため、結局、路上生活や性売買にたどりつくことになる。福祉機関が頼れないということを経験した若年女性は、性を買われることによって今とは別の寝場所や金銭の確保をしようとする。そちらの方が「信用できる」と彼女らには認識されていた。これは、福祉機関の支援の不十分さが若年女性たちの性搾取被害の危険性を高めているということを示唆している。

他には、虐待認定されてはいないものの、親に頼ることを拒み一人で出産しようとしている若年女性の場合に、福祉機関は親と連絡を取るべきだと若年女性の説得を試み、若年女性が同意しないまま出産予定日が近づいていたことがあった。このケースでは、児童相談所は親権者である親に知らせる義務があると主張したが、若年女性が同意しなかったため児童相談所は若年女性を一時保護しなかった。その結果として、妊娠後期の若年女性が路上で生活せざるをえない状況をつくりだしてしまっており、(行政的) 手続きが重視されるなかで若年女性の生活が危険にさらされる事態になっていた。

ii) 職員からの不信感を抱かせる対応

職員の態度や言葉から福祉機関に不信感を抱くようになった若年女性もいる。例えば、妊娠を児童相談所の職員に打ち明けた際に、育てるのが難しいのではと言われた若年女性や、福祉機関の職員から、児童養護施設で生活していることについて「普通ではない」と言われたことを、辛い経験として覚えている若年女性もいた。彼女は、施設で生活することが福祉機関

の職員からも差別的にみられていると感じていた。他にも、理由を説明されずに施設を移る経験をした人、施設内での性被害に適切な対応がなされずに失望を感じた人、監視的なまなざしを施設生活で感じていた人がいる。

iii) 厳格・理不尽なルールへの拒否感⁴

家族からの虐待が認定された若年女性たちは、児童福祉法や女性支援法、生活保護法、更生保護法等による入所型の生活支援施設に入ることになる場合もあるが、厳しいルールや理不尽に感じられるルールを守るよう求められることで窮屈さを感じており、それを刑務所のようだと例える若年女性もいた。その窮屈さは、場合によっては施設から家出して、友人宅やネットカフェなどへむかう要因になる。ルールは、集団生活という条件下で、さまざまな背景や事情を抱えた入所者間でのトラブルを避けるためや生活のリズムをつくるために作られていると考えられる。しかしながら、それが、若年女性たちを路上での生活や性搾取の被害に押し出してしまう要因になっている。ほかに朝に学校のようなチャイムがなることや、スピーカーから昼食時に音楽がいつもなっていることなどに「施設感」を感じ取り、拒否感を持つ人もいた。

iv) 職員からの暴力・性搾取

14 人のなかには、福祉機関職員からの暴力の被害経験者もいた。それは身体的な暴力として経験されることもあれば、裸にされて身体検査をされるなど性的なプライバシーを侵害されることが精神的苦痛を与えられるものとして経験されることもある。職員から恋愛関係を求められるような経験をした者もあり、性暴力によって若年女性はや傷つけられ、大人や支援機関への信頼を喪失していた。しかし、支援者からの被害を被支援者が訴え出すことは難しく、支援機関での性被害は表面化しづらい。2021 年 7 月から 12 月にかけて、読売新聞が自治体へおこなった児童養護施設での性暴力の調査では、2016 年から 2020 年の 5 年間で 47 人の職員が 69 人の利用者にわいせつ行為をした疑いがあることがわかった⁵。こうした問題は、今後さらに調査をおこない対策が進められる必要がある。

⁴ 施設のルールに関する問題は、すでに他の調査研究でも指摘されている。三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング（2023）「一時保護所の設備・運営基準策定のための調査研究報告書」など。

⁵ 読売新聞オンライン 2021 年 12 月 26 日（<https://www.yomiuri.co.jp/national/20211225-OYT1T50211/>）

v) 煩雑な手続き

福祉機関における煩雑な手続きは、若年女性たちが支援を求めることを諦める一つの要因である。ハローワークや生活保護制度利用の窓口などで、必要な書類や支給される費用の説明の煩雑さによって、窓口に一人で行くことに対して若年女性が不安を示した記録があった。煩雑な手続きは利用可能なはずの制度から若年女性を遠ざける。さらに職員の事務的な対応が冷たく感じ取られ、若年女性を遠ざけることもある。そうした経験は、福祉制度全体への諦めにもつながりうる。

vi) 福祉機関の連携不足・あるいは責任の押し付け合い

支援機関の間での連携不足がうかがえる記録も複数あった。たとえば、医療機関受診が必要な若年女性が一時保護の判断を待っていたものの、児童相談所からは市の子ども家庭支援担当課から連絡があるといわれ、市の子ども家庭支援担当課に確認すると児童相談所の指示がないと動けないと言われたことがあった。このように一刻もはやく福祉機関が責任をもって対応することが必要になる場合であっても、複数機関の間での連携不足や責任の押し付け合いなどによって、対応が遅れることがある。そしてその間に、若年女性たちが体調をさらに崩したり、犯罪被害にあったりする危険性が高まっている。こうした問題は特に、年齢による制度設計（児童福祉とその他の福祉制度）や担当窓口の縦割り（女性支援や生活保護、子育て支援など）によって、若年女性支援に生じやすいものであるともいえる。

⑥ 非福祉機関での経験（病院・大学・雇用機会等）

非福祉機関での対応も若年女性たちの生活を左右する。若年女性たちへの対応にかかわって登場するのが大学や奨学金給付機関である学生支援機構、医療機関、職場などである。

i) 虐待問題への無理解

まず、虐待問題に対する無理解により生じる問題がある。例えば、家族からの虐待を学校の先生に相談したことで、学校の先生から家族に伝わり、さらに虐待がひどくなった者がいる。また、虐待をする親から逃げて居住の場を確保し大学に通っていたが、重要な書類が親のいる実家に届けられてしまったり、親から大学に本人の現住所の問い合わせが来た場合に本人の住所を伝えないよう協力を依頼しても、その協力が得られないことがあった。

ii) 悪者化される経験

Colabo につながる若年女性は、家出や虐待の経験、社会的養護施設での生活、性搾取の被害などのなかでしばしば「悪者化」される。例えば、ある若年女性は施設生活をしているということだけで、学校内で悪さをするのではないかというまなざしを向けられることがあった。活動記録に残る若年女性の言葉からは、こうした経験が彼女たちの自尊心を傷つけ、自分を価値のない存在だと思い込ませることや、他者への信頼を失わせること、生活空間の居心地を悪くさせていることがうかがえた。また、ある若年女性は警察に補導された際、まるで犯罪者のように扱われたことが今でも嫌な記憶として残っていると Colabo スタッフに話している。家出した若者たちはしばしば警察の補導対象となる。その際、若者は大人の適切なケアを得られず逃げてきた存在であるにもかかわらず、「不良」な若者として対応される。それは、家出する若者たちを認識する制度が、すでに犯罪者扱いする枠組みとなっているためである。このような制度構造のもと、若年女性が困りごとから逃げている状況が彼女らの「素行不良」として見なされ、問題が若年女性に押し付けられてしまうのである。

iii) 雇用機会での搾取

若年女性たちの生活の困難と雇用の問題が相互に影響を与え合う場合もあった。家出しており住所を書くことができなかつたり、親のサインを求められても提出できなかつたりする若年女性たちは、雇用契約が曖昧であっても雇ってもらうために確認せずにいることがある。また、雇用契約について相談する人がいない場合、企業の不備のある雇用契約書に意味もわからないままサインしてしまうことがある。そうして若年女性は過重な労働や不安定な雇用関係を強いられることになる。

以上が、協力してくれた 14 人の活動記録から見てきた状況である。個人が特定されないようにしつつ、実際の状況を踏まえて若年女性たちが経験する困難やその背景について整理してきたが、社会の側がどのように変化すべきかに関する示唆は大きい。

3

Colabo の若年女性とのかかわり

3-1. LINEのやり取りから見るかかわり

LINEのやり取りを確認する理由

Colabo と若年女性とのかかわりは多岐にわたる。バスカフェやシェルター、シェアハウス、活動する拠点などの場で直接的なかかわりを中心として、信頼関係が築かれ、また日々の相談が、ときには何気ない会話を通して、ときには個別の困りごとの相談を通してやりとりされる。

そのため LINE でのかかわりは、一つの手段でしかないが、LINE 上でのやりとりから伺えた点についてもここで少し書いておきたい。近年、SNS のツールを通じた相談は、とくに若者支援の分野で注目されている。実際、電話や対面での相談は若者にとって最初のハードルが高い場合も多く、気軽に相談できる LINE 相談や X (旧 Twitter) などを通じてのやり取りも、支援団体に用いられるようになってきた。そうした状況下で、Colabo のスタッフがどのように LINE 上で若年女性とやり取りしているのかについて確認できることを整理しておくことも、今後の実践において参考になると考えた。

LINEの分析

Colabo の活動記録のなかで確認された LINE のやり取り記録を、個人情報削除したうえで、KHcoder⁶によって分析した。14 人のうち 2-1 の三つの区分をもとに、一人から二人をピックアップして LINE の詳細な検討を行い、そのうえで、焦点化して全体の LINE のやり取りを確認した。

やり取りの特徴

① 絵文字の頻出

まず、やりとり上での頻出が目立つのは絵文字や顔文字である。特に絵文字は、若年女性からも Colabo スタッフからも多用されており、個々の種類に分けずにカウントすると最も頻

⁶ テキストデータの計量的な内容分析をおこなうソフトウェア。

出するものになる。またその種類も多様であり、数十種類の顔文字・絵文字が駆使されてやりとりが進んでいた。スタンプなども使用されており、若者の絵文字・顔文字・スタンプの文化をある程度共有し、使用するスタッフとの間でのやり取りは、「支援機関」や「大人」に対して感じがちなかたさを和らげている。

② 「一緒に」という言葉の頻出

スタッフから若者へのメッセージのなかで特徴的に見られたのは「一緒に」という言葉であった。以下の表1はある若年女性へのスタッフからのメッセージにおける頻出語 1 位～ 50 位である。

表1. ある若年女性へのスタッフからのメッセージにおける頻出語 1 位～ 50 位

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
😊	119	今	31	書く	23	出す	18	説明	15
思う	116	連絡	31	聞く	23	前	18	相談	15
～	68	💖	30	涙	23	ありがとう	17	病院	15
言う	65	一緒に	26	いつ	21	住所	17	部屋	15
大丈夫	52	行く	26	写真	20	家	16	役所	15
人	41	生活	26	伝える	20	教える	16	ご飯	14
明日	38	契約	25	電話	20	話	16	バス	14
スタンプ	37	会社	24	話す	20	頑張る	15	蕎麦	14
Colabo	33	時間	24	食べる	19	考える	15	仕事	14
今日	32	見る	23	来る	19	持つ	15	確認	13

では、どのような文脈で「一緒に」という言葉が登場するのか。以下はやり取りの一例である。

「ご飯会があるんだけど、よかったら一緒にに行かない😊？」

「またわかったら教えてね😊 明日また午後家に行くから、そのとき病院に一緒に電話してみよ！」

こうした、病院等への「同行支援」ということに留まるものではなく、上記に一部例示したように「一緒に食べる」や「一緒に行く」など、ともに体験することも含んでいる。こうしたやりとりからは、若年女性一人で何かをするように呼び掛けるのではなく、Colaboのスタッフや他の若年女性と場や活動を共有することを通して、若年女性の活動の場を拡げ、スタッフや他の若年女性とのかかわりを深めていることがうかがえる⁷。

⁷ 仁藤編（2022）でも「一緒にする」という姿勢が Colabo の特徴であることがうかがえる。また、若年女性や協働する関係者からも、「一緒にする」という Colabo の活動の特徴やその意義が指摘されている（例えば、仁藤編（2022）の P.48-49、P.111 など）

目の前の課題解決と具体的な行動のサポート

以下では、Colabo スタッフの Z さんと若年女性たちの LINE のやりとりで使用されている言葉同士の関連を示した共起ネットワーク図⁸をみていく。

LINE のやりとりに注目した時に気づくのは、若年女性たちとのかかわりの初期に LINE でのやりとりが活発かつ細やかにおこなわれていることである。Colabo では、LINE でのやりとりを通じて、困りごとを抱えて Colabo にやってきた若年女性たちの Colabo に対する安心感と信頼感をはぐくむとともに、彼女たち自身がその時に困っていることがらに具体的に対処していつている。

若年女性たちが Colabo の活動に参加する機会が増えたり、シェルターやシェアハウスに居住するようになる中で、直接スタッフと対面でやりとりをすることが増えると、LINE の頻度は減っていくが、丁寧なやりとりを重ね、若年女性のおかれた状況を正確に把握しながら、信頼関係を築いている。

① Aさんの場合

Aさんは地方から上京し、バスカフェを訪れたことによって Colabo とつながった。Aさんからの相談を受け、Colabo では、A さんの生活を安定させるために生活保護申請に同行し、Aさんは Colabo のシェアハウスに入居し、シェアハウス入居後は Colabo のスタッフとは対面でやりとりすることが増えたため、LINE でのやりとりはかかわりの最初期に限定されている。以下にAさんが Colabo に送った LINE の共起ネットワーク（図1）と、Colabo の Z さんが Aさんに送った LINE の共起ネットワーク（図2）を示す。

Aさんからの LINE の共起ネットワークは、A さんが地方から東京に出てきて、シェアハウスに入り、アルバイトの応募をはじめる時期のやりとりとなっている。Aさんは、Colabo スタッフが彼女をなにかと気にかけてくれることに対し「ありがとう」と感謝の意を度々示している。アルバイトの「応募」をすることと、Colabo のイベントや活動に「行く」ことについて話題にしつつ、たまに自分の感情・考え（「思う」）を表明するものの、全体として言葉数は多くはなく、また具体的記述も少ない。

それに対して Colabo からAさんへ送った LINE の共起ネットワークでは、多様な話題があげられ、具体的な提案がなされていることが特徴的である。A さんからの LINE に比して、Colabo からの LINE は単語数・情報量が多く、以下のようなことが展開されている。

⁸ よく一緒に使われている語同士を、線で結んだネットワーク図。

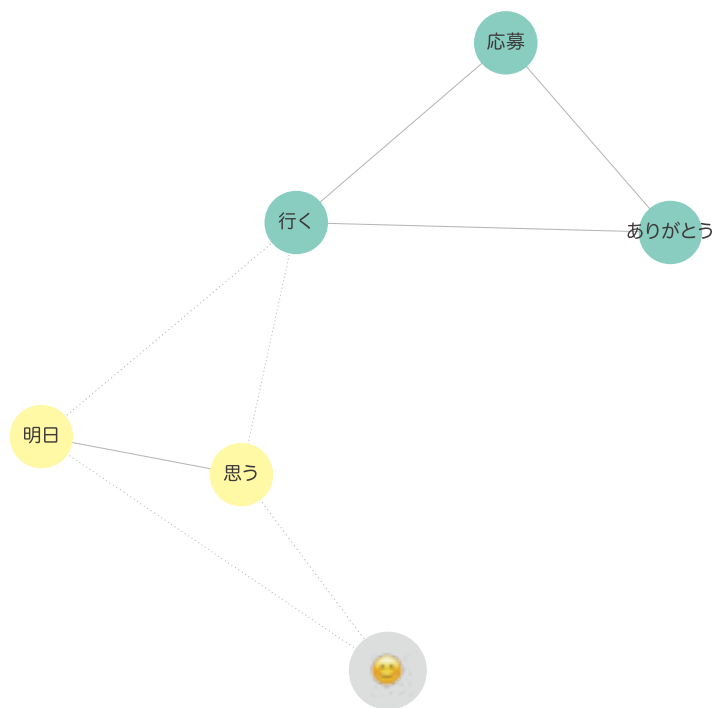


図1：AさんがColabo に送ったLINE のやりとり

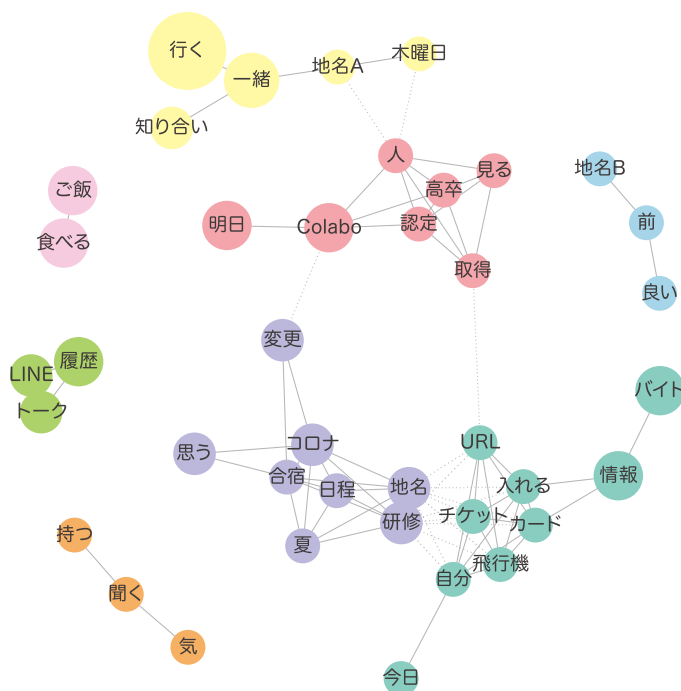
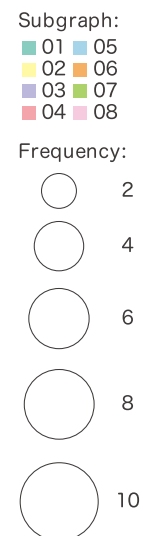


図2：Colabo がA さんに送ったLINE のやりとり



① 日常の活動への参加や具体的な手続きのやり方を伝えるなどの生活安定のためのサポート

「食事」をしているかを気にかけたり、なにかをする際に「一緒に」「行く」ことを投げかけられることによって、Aさんを励ますと共に、Aさん一人ではまっとうすることが難しいことも完遂できるようになっている。ここでは、支援者というより少し年長の友人や親せきのようなかかわりが見てとれる。

② 新たな経験機会の提供による現在の充実

同時に、新たな経験機会の提供によって、若年女性たちがこれまでしてこなかった経験機会をつくるとともに、現在を充実させていくことも実現している。Aさんに対して、Colabo が企画した遠方への「合宿」への誘いがなされると共に、「合宿」に行くための「飛行機」の「チケット」の使い方などの具体的方法が伝えられている。

③ 未来を見据えた働きかけ

そのように現在を充実させていくと同時に、未来を見据えた働きかけとして、「高卒認定試験」を受けていくことを呼びかけ、Aさんの進路の幅を拡大していけるような働きかけをしている。

② Bさんの場合

Bさんは外国にルーツをもち、親の虐待から逃れるために大学進学を機に Colabo のシェアハウスに入居している。大学に進学するにあたって、①実家とのかかわり、②進学のための事務手続きの両方について、Colabo スタッフの Z さんに相談しながら進めている。Bさんには、実家を出て進学するために、自分自身でやらなければならないことが多く存在している。たとえば奨学金の「返還」の「誓約」書の提出や「保証」人の提示など、10代がひとりで対応していくのが簡単ではない事柄をひとつひとつ Colabo にたずねながら進めている様子がみとれる。このケースでは B さん自身から具体的な質問や SOS が投げかけられているため、B さん側の共起ネットワーク（図 3）のバリエーションも幅広い。

Colabo から B さんへの LINE の共起ネットワーク（図 4）では、「経済」的な問題に対応するための「奨学」金をはじめとした「学生」「支援」のやりとりや手続きについてサポートがなされている。「社会」での「自立」した「生活」を実現できるように情報提供をしつつ、B さんに対して一人で抱え込まず「頼る」よう呼びかけている。

「言う」という単語がしばしば用いられていることも特徴のひとつで、B さんが保護者や大学とやりとりするにあたってどのように対応していけばよいかを具体的にアドバイスすることによって、B さんが自身の状況に対応することを援助している。

日本においては、家族が子どもの育ちへの一義的な責任を負っているために、家族からのサポートを受けづらい若年女性が頼れる存在を見つけることは簡単なことではない。頼れる存在を見つけづらいことが、繁華街での性売買など即時的な資源の入手へと若年女性を導いてしまうからこそ、「頼る」ことの大切さを若年女性に伝え、実際に若年女性が「頼る」ことのできる存在となっていく Colabo のようなかかわりは貴重だといえる。

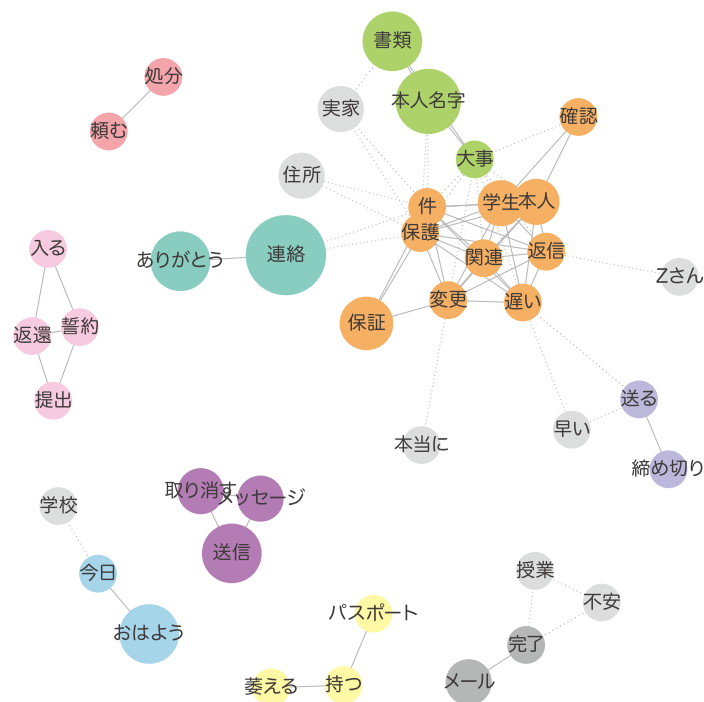


図3：BさんがColabo に送ったLINE のやりとり

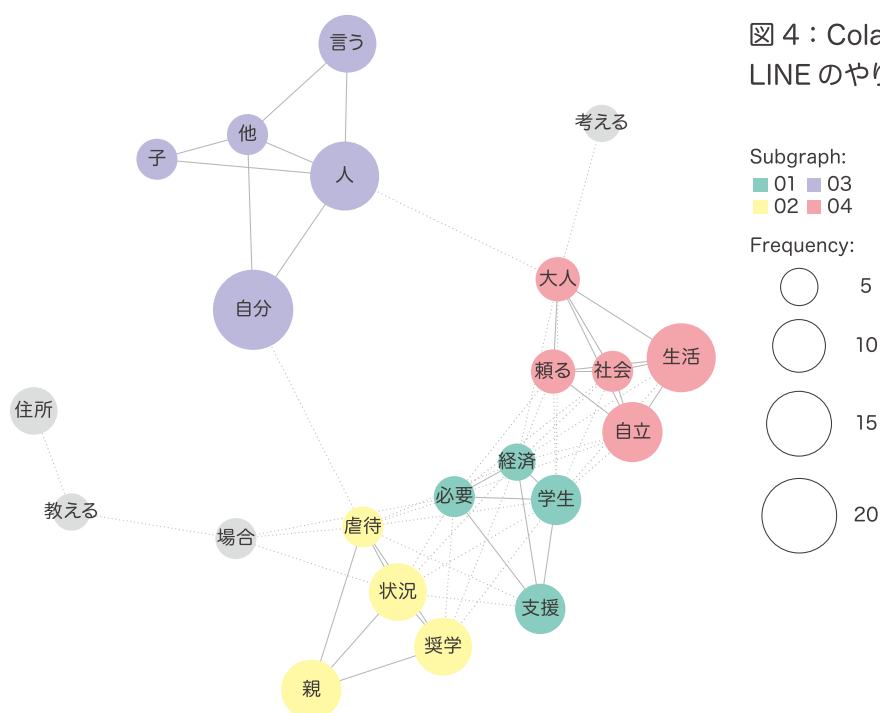


図4：Colabo がB さんに送ったLINE のやりとり

まとめ

Colabo スタッフは、A さんに対しては平易で具体的な呼びかけを行い、A さんの状況に対応しつつも新たな視点や出会いを提供している。B さんに対しては、不安や疑問に一緒に対応しながら本人の希望を実現していくことに伴走している。2 人の LINE のやりとりをみると、Colabo が若年女性の性格や特性に応じて柔軟に対応を変えながら、若年女性に届きやすい内容や働きかけをしていることがわかる。

3-2. かかわりによる若年女性への影響 —2人の若年女性の事例分析から

Colaboは若年女性にどのようにかかわっているのか、 Colaboのかかわりが若年女性にどのような影響・効果を 及ぼしているのか

ここでは Colabo の活動記録及び Colabo と若年女性の LINE のやり取りを時系列に分析することにより、Colabo の活動が若年女性に及ぼした影響・効果を検証する。具体的には、活動記録や LINE のやり取りから得られた情報をもとにエコマップ⁹を作成し、若年女性を取り巻く人や機関の関係性の遷移を可視化する。また、LINE でやりとりされた会話(スタンプを除く)を KH Coder を用いて質的に分析し、頻出語に着目して Colabo と若年女性の関係性の変化を考察する。

① 事例の概要

Colabo との接触期間や物理的距離（居住地と Colabo の活動拠点との距離）、家族構成などに違いがある2人の若年女性（以下、Cさん、Dさん）を対象とした。以下の2人のプロフィールは、事実関係を大きくゆがめない範囲内で本人が特定されないように変更を加えている。

Cさんは関東出身で19歳の時に Colabo とつながった。定位家族は父・母・兄・本人。解離性人格障害で障害者手帳を所持しており服薬中である。母親が心筋梗塞で倒れマヒが残ったため介護していた時期があった。両親の離婚後、父と兄と暮らしていたが、兄から性虐待、父から身体的虐待を受けた。児童養護施設等複数の施設に入所したが、職員からの差別や性被害、心理的ダメージを受け、実家に戻った。その後家出し性売買に関わったが精神を病んで入院し、その先の受け入れ施設が見つからないことから再び実家に戻されると聞いて不安になり Colabo に連絡した。Colabo のシェルターに保護され、Colabo の活動にも参加できるようになる。トラウマ等の影響による衝動的な行動や、繰り返される性被害、人間関係の不和、精神的不安から入退院や転居を繰り返したが、徐々に生活は落ち着き、就労移行支援事業の研修を受けるなどしている。調査時点では生活保護を利用しながらシェアハウスで生活し、定期的に通院しながら、Colabo の活動に頻繁に参加していた。

⁹ 社会関係図やネットワーク図などと呼ばれ、本人と周囲（人や機関など）との関係性を線種によって図示するツール。

Dさんは九州出身で、19歳の時に Colabo につながった。定位家族は父・母・本人。障害者手帳を所持している。小学生の時に親が刑務所に入り児童養護施設に入所していたことがある。親の出所後、高校を中退して再び親子3人で暮らすが、父から性虐待を受けた。SNSを通じた友人から Colabo を紹介され、Colabo の支援のもと家を出ることを決めた。Colabo のシェアハウスで暮らし始め、Colabo の活動にも参画するようになる。その後、子どもを身ごもり出産したが、子どもの父親は失踪した。母子共に女性自立支援施設に入所し、その後は生活保護を利用して母子生活支援施設等に入所した後、Colabo の近くのアパートに転居した。子どもが保育園に通園を始めた年の中頃に、育児に疲れて実家に帰省したまま戻らなくなり、生活保護も打ち切られた。現在の家族構成は母・母の彼氏・本人・本人の子どもである。Colabo とは地理的にも距離があるため、つながりが薄くなっている。

② エコマップから見る関係性の変化

Colabo がかわる前後の2人のエコマップを比較しながら、2人を取り巻く関係性の変化を見ていこう。図5・図6に示すエコマップは、本人を取り巻く関係者・機関を4つのカテゴリー（「家族・親族」「Colabo 関係者（スタッフ、ボランティア、Colabo の活動を通して繋がった他の若年女性等）」「Colabo 以外の支援機関（福祉・医療機関、役所、警察、NPO 等）」「その他」）に分けて配置の領域を決め整理した。また、匿名性を担保しつつわかりやすく表記するために、関係者・機関をある程度カテゴリー化した。さらに、関係性を示す線種を3種に着色（橙：良好な関係、青：良好でない関係、黄：中間的な関係）した。矢印の向きは働きかけの方向を、線の太さは関係性の太さを示し、ストレスや葛藤のある関係は線上に交差する線を加えている。

Cさん・Dさんとも、Colabo にかかわる前後で、本人を取り巻く関係者や団体の数や種類が大きく変化している点は共通しているが、Cさんの方が人間関係の数や種類が多くなっている。また、Cさんは本人を中心に交流が広がっているが、Dさんは出産した子どもを中心に人間関係が結ばれているところに特徴がある。

エコマップから見える C さんの像是、良い方にも悪い方にも人間関係が広がっていくタイプである。性売買業者等とのつながりにもあまり抵抗がない様子であり、過去に交流のあった男性からはしばしばストーカーや性被害にあう経験もしている。人との関係性を結ぶにあたって安全さを見極められない状態にあったが、Colabo が介入することによって、性売買関係者とのつながりが減る一方で同世代の友人や支援機関・団体が増えており、良好なつながりを作っている状況が見られる（図 5）。

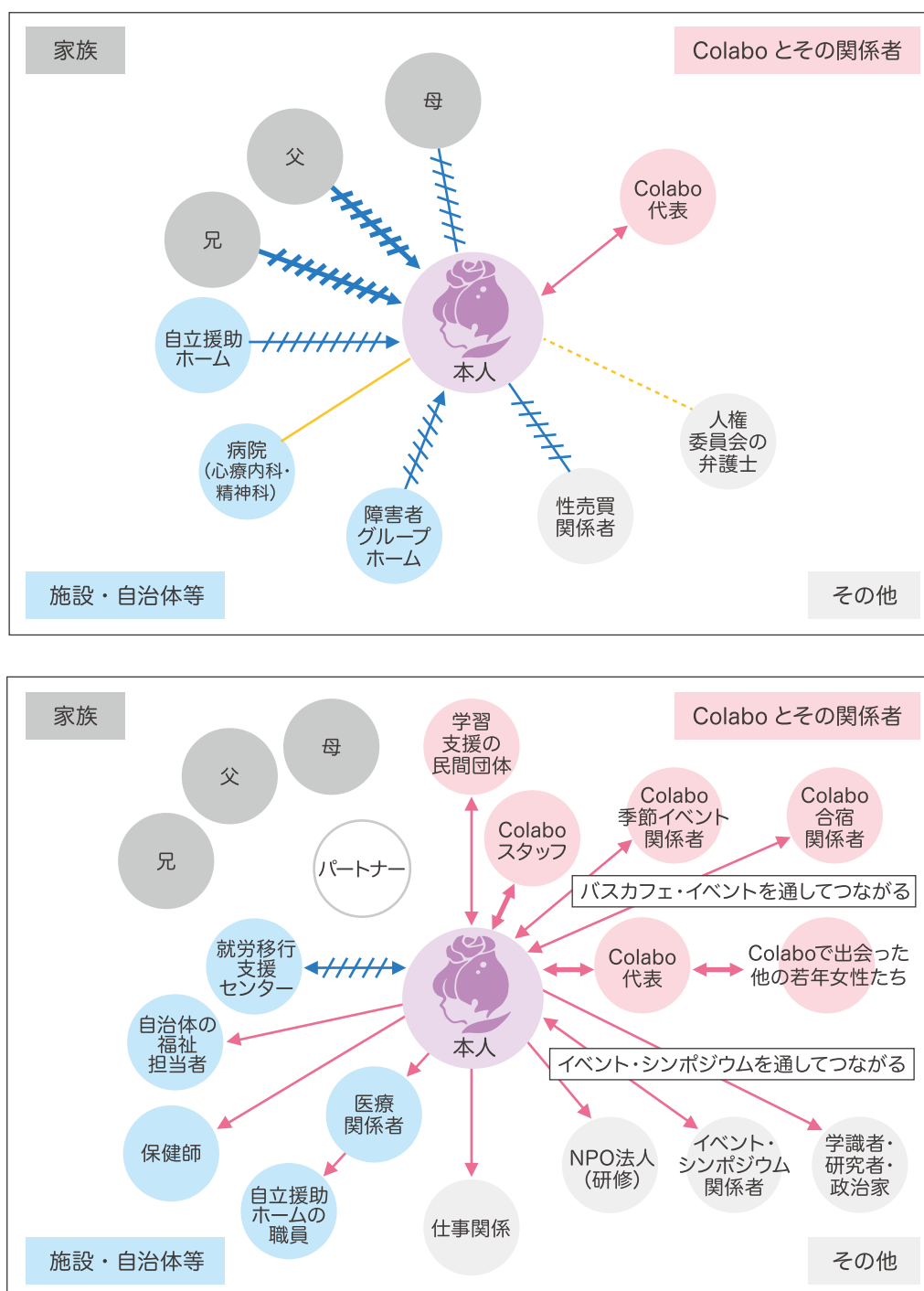


図 5：C さんのエコマップ（上：支援前、下：支援後）

Dさんは、実家を出るまではほとんど家族とその関係者との付き合いしかなく、親からの性虐待や高校中退などで孤立した状況にあったにもかかわらず、SNS でつながった友人に状況を打ち明けた以外は特に自らアクションを起こしていない。Colabo とつながってからも、実家を出るまでに 1 年を要している。置かれた状況にひたすら耐えて現状に居続け外部とのやり取りに消極的になるような状況でも、Colabo は積極的に声をかけ続け、本人が家を出るなどの決断をできるようにかかわり、そのタイミングで具体的な支援を迅速に行っている。また、Dさんの場合は、子どもを産み育てることが大きなきっかけになって、Colabo とのつながりが深まったり他の支援機関とのつながりが広まったりしている（図 6）。

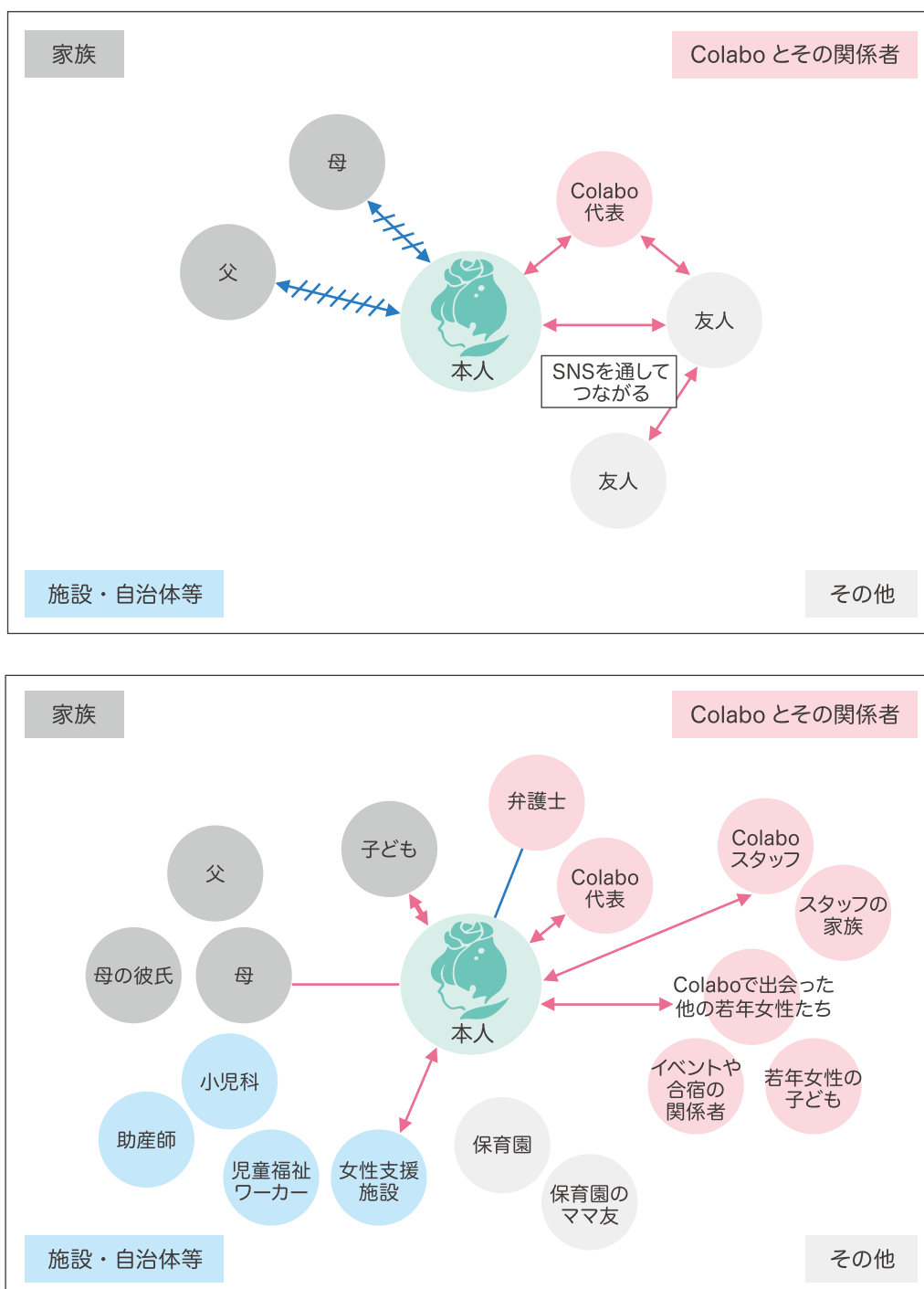


図 6：Dさんのエコマップ（上：支援前、下：支援後～実家に戻る前）

③ LINEのやり取りから見る関係性の変化

次に、Cさん・DさんとColaboのスタッフのZさんとのLINE上のやり取りの変遷から関係性の変化を見ていこう。

図7-1、7-2は、CさんとColaboのZさんのLINEのやり取りを、Colaboと継続的につながりを持ち始めた最初の6か月間（以下、支援前期）とその後現在に至るまでの期間（以下、支援後期）に分けて作成した共起ネットワーク図で、共起関係の強い上位100の関係性を描画している。つながりの強い部分ごとにグループ分け（色分け）されて表示されており、主要な話題を知る手掛かりとなる。

支援前期は、CさんはColaboよりも学習支援を受けていた民間団体とのつながりが強く、Colaboはその民間団体を通じて情報を得ることが多い状況であった。CさんからZさんへのやり取りは以下の7つのグループ（話題）に分類される。①Zさんに対する呼びかけ・近況報告、②入院・手術への不安と就労事業の参加報告、③Colaboの活動への参加の意気込み・楽しみ、④Colaboの活動への参加表明・感謝の思い、⑤家族や関係者との人間関係に対する不安・緊張・期待、⑥自身の考えや気持ち・思い、⑦バスカフェの活動等、となる（図7-1上）。これに対しZさんからCさんへのやり取りは以下の6つに分類される。①入院等の不安に対する励まし・声掛け、②バスカフェの活動への参加の誘いと感謝、③絵文字を主体としたCさんへの呼びかけ・共感、④手術後の回復への期待・術後の現状の肯定、⑤Cさんからの連絡に対する感謝、⑥求職状況の確認・相談（図7-1下）。

支援後期は、Cさんが入院・手術を行うことになり、就労や手術に関する不安などから頻繁にZさんに連絡するようになった時期である。ZさんからもたびたびColaboが開催するイベントの案内などを行って活動への参加を呼び掛け、徐々にColaboの活動に参加するようになっていった。支援後期のCさんからZさんへのやり取りは以下の7つに分類される。

①Zさんへの呼びかけ・活動への参加表明、②Colaboで出会った他の若年女性に対する思い・それを通じた「生きる」ことに対する思い、③自身の考えや気持ち・思い、④人や書物等から得た学び、⑤感謝の思い、⑥予定・スケジュールの確認、⑦「頑張る」という意思表示（図7-2上）。一方、ZさんからCさんへのやり取りは以下の7つに分類される。①「伝える」「書く」など自分を表現することの大事さ、②人や書物等を通じた学びや感想、③他団体や海外における活動等を通じた学びや性売買に関する問題意識の共有・「自分」を大事にすること、④直近の約束や予定の確認、⑤イベント等への声掛け、⑥「一緒に」行動する呼びかけ、⑦バスカフェの活動への参加の誘いとお礼（図7-2下）。

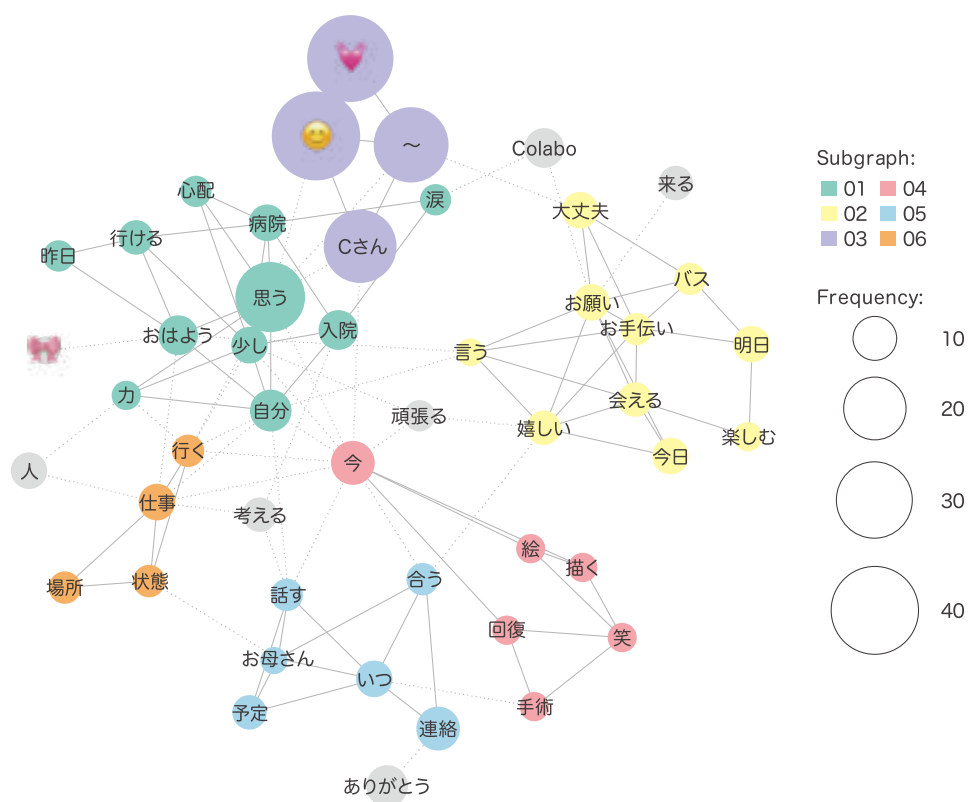
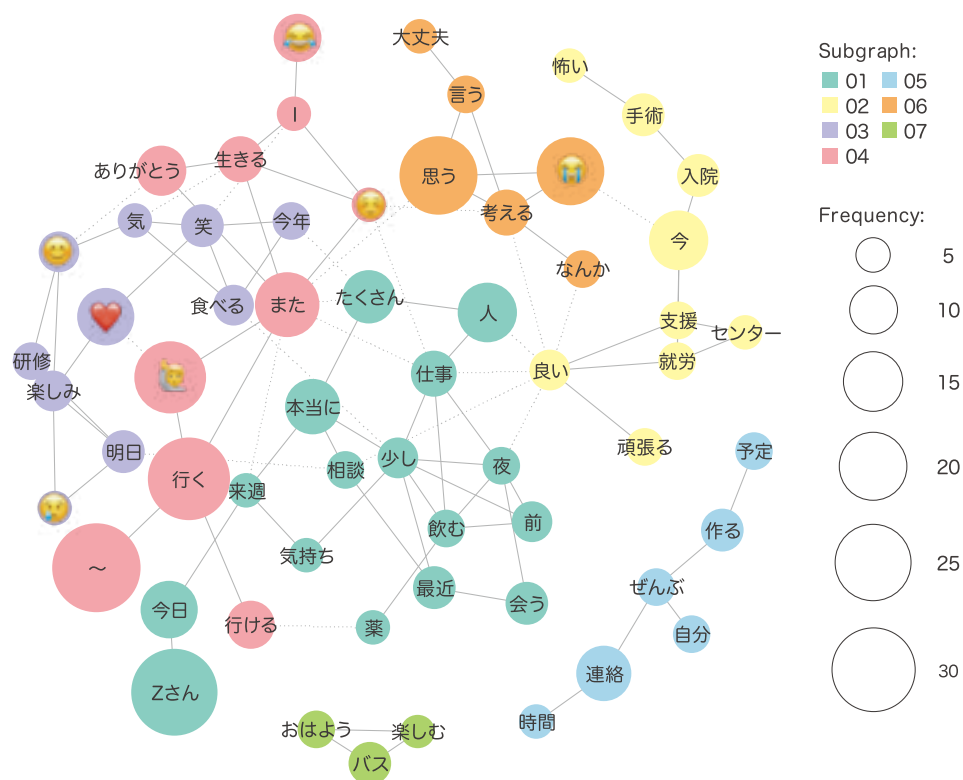


図 7-1 : C さんと Z さんの LINE のやりとり (上 : C さん支援前期、下 : Z さん支援前期)

支援前期と支援後期の変化を見ると、C さんから Z さんへのやり取りにおいては、個人的な悩み（健康状態や仕事に関すること）の相談が減少し、代わって、Colabo を通じて出会った他の若年女性の生き方や考え方に関する感想や思いや、人や書物等を通じた学びに関する話題が新しく加わっている。また、嬉しさや楽しさ、感謝を表す絵文字の種類や数が増え肯定的な感情表現が目立つ。Z さんから C さんへのやり取りにおいては、支援前期は C さんの個人的な相談（病気や仕事や親との関係等）に対する応答が主流であるが、支援後期は Colabo の活動やイベントの情報提供を積極的に行い、一緒に行動することを呼びかけ、人や書物等からの学びや思いを伝えたりしている。

D さんと Z さんの LINE の共起ネットワーク図は、紙幅の都合でここでは省略するが、D さんとのやり取りにおいては、D さんの出産前後の支援を行っていることから、LINE のやり取りも子どものことや子育ての話が中心になっている。D さんからの発信内容は子どもが保育園に通っていることを報告する以外はあまり具体的でない。時間的な経緯を見ると、Colabo と積極的にかかわりを持っている時期は感謝を表す言葉や絵文字が増えているが、実家に戻り Colabo と物理的な距離が離れると一挙に発信数が減少し、子どもに関する話題もほとんど発信されなくなっている。一方、Z さんからは役所への連絡・確認事項や、児童手当に関すること、子どもの発熱に対する対応など、時機に応じてこまめな情報を提供している。D さんが実家に戻り Colabo との距離が離れてからも、発信量はほとんど変わらず、D さんの名前を呼びかけて、「会う」「来る」など積極的に接点を持つための働きかけが行われている。

Z さんと C さん・D さんとのやり取りに共通しているのは、C さん・D さんからの発信量にかかわらず、Z さんからは支援期間全体を通して、名前の呼びかけ・写真のやり取り・共感を示すやり取りを積極的に行っていることである。普段からこのようなやり取りを行っているからこそ、C さんや D さんとのコミュニケーションが構築され、C さん・D さんを取り巻く環境が変わってもそのコミュニケーションが継続されている。

④ Colaboの役割・機能

Cさん・Dさんの事例は、いずれも Colabo が中長期的につながることにより当事者の関係性を広げることに寄与している。中長期的なかかわりの中で、本人からの連絡がない時にも Colabo の方から連絡を取り続け、何らかの状況の変化があった時にサポートができる関係を維持している。支援関係を結んだ若年女性に対しては継続的に連絡を取り続け「支援終了」としないのは、行政の申請主義とは異なる。そのように Colabo の対応は、公的機関のような平等性・公平性を優先するのではなく、それぞれの当事者に個別かつ特別に対応しているところが特徴である。具体的には、勉強会・イベント・シンポジウム・社会運動を意図的に開催して当事者の参画を促し、当事者が参加することを通して、スタッフや他の参加者と一緒に怒りや学びを共有し、色々な人とつながりをもてるような機会を提供している。当事者との中長期的なかかわりの中で、タイミングを見ながら使える人や資源とつなげて具体的なアクションを起こす。当事者はそのことによって支えや頼りを得たという実感を得ることができる。この時重要なのは、「やりすぎない支援」を行うことである。Colabo は必要に応じて人や資源とつなげたり選択肢を示したりするが、選択し行動を起こすのは当事者に任せる姿勢を取っている。その結果、時間がかかったり若年女性が自身の不利益となるような選択や行動をとる場合もあるが、辛抱強く当事者に寄り添う姿勢を貫いている。一方で、即自的な対応をしている点も特徴といえる。たとえば、Cさんの手術に対する不安や「死にたい」という発信に対し、それぞれその数分後にはZさんから応答が返されている。

Colabo のもう一つの特徴は、当事者性があることである。当事者に近い若い世代のスタッフが多数いることが Colabo の強みとなっている。当事者と近い世代のスタッフは、当事者が抱える問題の把握や理解が早いだけでなく、当事者の状態や特有のコミュニケーション・態度などに対しても適切に対応することができる場合が多い。Colabo では、代表をはじめ複数のスタッフ間で情報を共有し、当事者の状況の見立てを行っている。本人から表明されたニーズだけでなく、潜在化しているニーズを顕在化させようとしているところも特徴である。このような方法によって、Colabo は当事者との間に単調ではないつながりを形成している。

⑤ 周囲との関係性に影響を与えるColabo以外の要素

CさんとDさんのエコマップの形やその展開、およびLINEのやり取りの内容には多少の相違がある。その要因として、当事者の性格、家族関係、同棲・結婚といったライフイベントなどが考えられる。とくに、ライフイベントのうち、出産は女性特有のものであると言える。今回取り上げたDさんの事例にみるように、Colaboのかかわる若年女性が出産をするケースでは、相手の男性の情報がほとんど出てこず、一人で出産し子育てをしているケースが少なくない。

このような当事者の状況を踏まえたうえで、当事者を取り巻くつながり・関係性を広げていく必要がある。

まとめ

2人の若年女性の事例を取り上げ、Colaboがかかわる前後を含む複数のエコマップの描写、及びLINEのやり取りを質的に分析することにより、当事者像やColaboの機能・役割を考察した。

当事者を取り巻く人や機関の関係性の構築には、当事者の性格や家族環境、ライフイベントなど様々な要素が影響するが、Colaboが介入することにより、良好な関係性が広がり、当事者の心身の状態や生活の改善につながっている傾向が見られた。逆に、Colaboの介入がなくなると本人を取り巻く人や機関の関係性が悪化しており、Colaboから離れた当事者についても継続的な支援が必要である。現況はColaboが地理的な距離があってもSNSを通してつながりを維持しているが、Colabo以外にも近距離で日常的なやりとりやサポートをする存在が必要であることが示唆された。

4

若年女性に対する 支援のあり方に関する提案

1) 若年女性が抱える背景に対する理解

今回の検討では、若年女性が現在の状況に至るまでの背景やプロセスに対する理解が十分に
なされていないために、表面に表れている言動——言葉遣いや服装、化粧、ふるまい、SNS
によるコミュニケーションをはじめ、家出、不登校、高校中退、若年妊娠、性売買、オーバード
ーズ（過量服薬）やリストカットなどの自傷行為、公的機関・施設での不適応など——によ
って若年女性が判断され、「問題」があるとみなされてしまっていることが浮かび上がってきた。
若年女性の言動や価値観は、彼女たちの生活文化やこれまでの傷つきを反映して形成されて
きたものである。一般的な社会規範とは異なる場合もあるそれらを単に批判・非難するだけ
でなく、その生活文化を理解していくことや、本人の言動の背景に傷つき経験があるかもし
れないことを想定したうえでかかわるトラウマインフォームドケアの視点を持つことで、そ
の状況への対処方法も見えてくる。むしろそうした視点がなければ、若年女性を支える現場
でさらに彼女たちを傷つける二次被害も生じかねない。若年女性と出会い、かかわる大人は、
その時・その場における若年女性の言動だけでなく彼女たちのもつ背景を理解することにつ
とめ、その背景を踏まえて若年女性にかかわり続けることが求められる。

そのような理解や姿勢があることによって、若年女性自身が、他の相談機関や関係性のなか
では理解されないだろう、信じてもらえないかもしれないなどと思って話さずにいた経験や
抱えている困難について話してみようと思えることに繋がっている。

Colaboでは

■スタッフ自身も性売買の被害や家出などの当事者経験をもつ人が多い。そのよう
な直接的な経験を持たなくとも、差別や不平等などの社会問題に対する当事者性へ
の認識を持つことが求められる。また、かかわり続けてきた若年女性もアウトリー
チなどのスタッフとして活動することで、スタッフ・若年女性を問わず社会の問題
を認識する。Colabo でともに過ごすなかで現状への共通認識や課題を共有し、ロー
ルプレイをするなどして、活動を担う若年女性やスタッフ同士で相談・検討している。
さらに、新しくアウトリーチなどの活動を担うようになった若年女性やスタッフに、
経験を積んだ若年女性がかかわりの姿勢や具体的なアプローチの方法、リスク、若
年女性の背景などを教え、全体でかかわりを共有・検討している。若年女性を取り
巻く最新の状況やニーズを若年女性自身から教えてもらい、対応を更新している。

2) 硬直的な支援ではなく、柔軟で多様な支援メニューの整備

今回の検討からは、多くの若年女性が Colabo につながる前に公的機関につながった経験を少なからず持っていたことが明らかになった。公的機関につながっても状況が改善されない経験や、傷つけられる経験をして、公的機関への不信感や忌避感を持つ人も多く、公的機関の対応の在り方や公的機関の仕組みそのものに対する再検討が必要である。

公的機関・施設では、えてして法律・制度・規則に基づいて支援が行われるため、支援開始までに時間がかかったり、相談可能時間が限られていたり、若年女性にとっては理解や準備が難しい書類が必要であったり、対応が硬直的であったりする。また、制度下の支援メニューは種類も内容も限られており、使える支援メニューが見つからない場合も少なくない。使いたいメニューがあっても、利用にあたっては要件が課せられているため、要件を満たさない場合は利用できないこともある。支援を受けるのならば制約や不便は仕方がないという価値観がいまだ残ってはいるが、それは温情主義的対応であり人権保障の立場に立つ対応ではない。そのような価値観が若年女性を支援から遠ざけ、即時的だがリスクの高い生存手段を選ばせてしまう。若年女性の支援ニーズに合わせた多彩なメニューを準備したり、個々の状況に合わせてカスタマイズできるような工夫を行うなど、若年女性が納得して選択できる柔軟で多様な支援メニューが公的な福祉においても求められる。

Colaboでは

■若年女性の多様なニーズに即座に対応できる取り組みがあり、食事や泊まれる場を、出会ったその日・その場で提供できるようにしている（一時シェルター、シェアハウスなど）。それにより、まずは安心できる場を確保したうえで、今後の仕事や生活について考えることができるようになる。また、利用するために必要な書類や情報等の条件付けがなく、若年女性にとって利用のハードルが低い。

■LINE によるつながりがあり、またスタッフから継続的に声をかけ続け、Colabo の存在を思い出してもらうことで、若年女性の気が向いたときに、あるいは必要なときに連絡が取れるように工夫されている。すぐには相談がなくとも、しばらく時間がたって SOS が届くこともあり、柔軟な対応が可能となっている（公式 LINE、スタッフとの LINE、スタッフとのグループ LINE など）。

■食料や衣服、生活用品など生活に必要な物資を提供することで、生活上の必要に直接的に応える（バスカフェ、および活動拠点での物資提供、郵送など）。

3) 中長期的で継続的なかわり

若年女性の生活状況は、いったん落ち着いたように見えても波があり、再度不安定化したり、困難に陥ったりすることは少なくない。また、不安定で困難な状況に陥った時に即座に若年女性自身が声をあげられるともかぎらない。(そもそも本人が、不安定で困難な状況にあることに気づいていない場合も多い。また、不安定で困難な状況を改善することができると思っていないことも多い。) そのため、本人からの支援の申請・依頼がある時だけでなく、中長期的で継続的につながり続け、様々なかわりを通じて若年女性の歩みのそばにあり続けていくことが大切である。そのようなかわりによって、若年女性が困難に陥った時に迅速にサポートをすることができる。そして、たゆまぬかわり続けていく中で、若年女性は徐々に自分の力である程度生活をコントロールできるようになっていく。

また、Colabo では、自団体によるかわりだけでなく、若年女性一人ひとりの関心や状況に合わせて、多様な人や団体・機関とのかかわりをつくっている。若年女性のその時々生活拠点の近くで、Colabo の他にも必要な支援やケアを提供したりつながりを持つ複数の存在を作ることで、若年女性自身が状況に応じて頼り先を選ぶことができる。このことにより、若年女性が全国どこにいても、頼れる存在との中長期的で継続的なかわりを持つことが可能になる。現状では自治体によって公的支援機関を含む社会資源が量的にも質的にも十分ではない状況が見られ、改善が必要である。

Colaboでは

■Instagram・X(旧 Twitter) で、DM(ダイレクトメッセージ)を通したやりとりや、リアクションをすることで継続的に若年女性を気にかけていることを伝え、また日々の生活の様子を発信することで Colabo スタッフの活動を伝えている。そのことにより、Colabo と離れても様子がわかり、連絡を取らなくても繋がっている感覚を持つことができるようになっている。

■「支援の終結」ということがなく、若年女性が遠方に移り住んでも、返信がしばらくなくとも、継続的に連絡をし、かかわっている。またそうして一度離れた若年女性が再び Colabo のシェルターに戻ってきたり、活動に参加する様子を見ることで、他の若年女性にとっても戻ってきやすい場として Colabo が位置づいている。

4)「支援」としてよりも「仲間」としてのかかわり

困難な成育環境や経験をもつ若年女性たちは差別や暴力にさらされる中で、自尊感情を育めず、社会に対する不信感や諦めを抱いたり、自己責任や性搾取を当然視するような価値観を身につけていることもある。そのような価値観を転換し、社会や他者への信頼を築き直していくためには、できるだけフラットな関係を丁寧に編んでいくことが大切になってくる。関係性を広げることは当事者自身の力を育てることにつながる。Colabo の活動には、若年女性が社会運動への参加やそこでの学びや出会いを通じて気づきを得ていったり変化していくという部分もある。(他者の経験や活動を通して自分の過去の経験を見つめ再解釈する、自分のこととしては気づかなくても、他者の同様の経験に共感したり、それらに対して行動しようとするなど。) そのためには、Colabo のように中長期的にかかわり、当事者と人・資源をつなぐ役割をする人・機関の存在が必要である。

若年女性の抱える困難のみに焦点を当てる「支援」的かかわりのみではなく、困難への支援に限定されない社会や他者との日常的・非日常的かかわりを積み重ねることで、長年かけて形成されてきた価値観が少しずつ変化していくのである。そのため、居住支援をはじめとした困りごとへの対応と共に、Colabo に集まる若年女性同士での楽しい体験を積み重ねたり、差別や暴力へ抵抗する活動に参加することは重要な意味をもち、若年女性たちはそのような経験をしていくことで、生きていく力をつけていく。相談時の困りごとを単に解決するというだけでなく、様々な機会や関係性をつくり、共有する取り組みが求められる。

Colaboでは

- 「支援」のための雑談ではなく、ひとまず若年女性と関係性を築くための雑談を重視する。また、日常的なさまざまなイベントを企画し、楽しい時間を共有する（カラオケ、花見、クリスマス会、誕生会、成人祝い、スタッフの個人的なお祝い会など）。
- 社会運動への参加や合宿を通して、仲間として社会に向き合う経験を重ねる（沖縄や韓国への合宿、社会運動への参加など）。

5) 「一緒に」の声かけとかかわり

「仲間」としてのかかわりを象徴するのが、「一緒に」という声かけとかかわりである。若年女性と同じ目線に立ち、支援の情報を伝えるだけでなく、「一緒に」その支援を利用できるように考えたり、動いたりするといった若年女性に対する働きかけは、若年女性が一歩前に踏み出していくことを強く後押しする。環境を整えたらあとは自分でなんとかしていくことを求めるのではなく、「一緒に」やっていくことで、若年女性は励まされると共に、そのプロセスでつまづいた時にも周囲に助けを求めることができるのである。このような「一緒に」のかかわりは、単なる「同行支援」としてあるのみではない。「一緒に」食べること、イベントに参加すること、イベントを企画し実行すること、学習会などで学ぶことなどを通して、Colabo にかかわる他の若年女性や関係者との関係を深め、安心できる場をつくり、何かあれば立ち寄ることができる場を若年女性とともに築いていく営みでもある。また、若年女性が他者と「一緒に」問題解決に向けて行動し、改善していく経験を重ねることにより、大人や社会への信頼を回復するとともに、自らを様々な権利の主体であると認識し、自身の状況を変革できると思えるようになっていく。

そのためには、支援者は既存の法制度・慣行の枠組みの中でだけ対応していくのではなく、状況の打開に向けて若年女性と「一緒に」道をつくっていく姿勢が求められる。

Colaboでは

- 病院や役所、支援機関のみでなく、ライフイベントにかかわる行事にも一緒に行く。また、制度の矛盾などに直面した際に諦めず一緒に抗議し、弁護士や議員などの協力を得て、制度自体や運用方法を変化させる経験をする。
- 一緒に食べることを重視しており、食事の場を共有する。
- アウトリーチやシェルターの運営、社会への発信、誕生日会などの日常的イベントの企画運営に若年女性が主体的にかかわる。（「私たちは『買われた』展」の実施など）

若年女性を対象とした支援の在り方に関する研究
— Colabo とつながった若年女性に着目して —

調査・検討：岡部 茜、阿比留 久美、阪東 美智子

執 筆：岡部 茜、阿比留 久美、阪東 美智子、仁藤 夢乃

発 行 日：2025 年 6 月 14 日

発 行 者：一般社団法人 Colabo

本調査は日本財団「孤立・困窮する若年女性に対する相談対応
及び居場所支援」の助成により実施しました。



一般社団法人Colabo

<https://colabo-official.net/>

Supported by  日本 財団 THE NIPPON FOUNDATION

